

第41回 大阪府学校教育審議会（概要）

日 時：令和3年11月5日(金) 午前10時00分～午前11時40分

場 所：ホテルプリムローズ大阪 羽衣

出席委員：浅野良一会長、小田浩伸会長代理、池田佳子委員（オンライン出席）、沼守誠也委員、黒田隆之委員、小原美紀委員（オンライン出席）、山崎智恵子委員（オンライン出席）

審議内容等：中学校等へのヒアリング結果 ほか

質疑等

浅野会長：

それでは、今事務局からの資料説明や従前の議論も踏まえて、卓越性、多様性に係る答申の方向性、あるいは個別の項目についてのご意見をいただきたい。まずは、欠席されている委員の意見について事務局から紹介をお願いします。

教育総務企画課参事：

まずは小酒井委員からのご意見。

広報について、学校現場も大変だと思うが、外注すればよいというわけではない。訴えたい内容について、対外的にコミュニケーションができるような仕掛けを作ることが必要。校風よりも、組織の雰囲気や文化、活性の度合いに依存している。管理職や現場のカギとなる教員が異動になれば、校風も変わってしまう。活性化されている学校に人気があるのはそういうことだと思う。活性化は、教育業界でいう組織が持っている無形の資産。教員・組織が持っている文化が、ダイレクトに生徒からの肯定的評価に繋がっている結果だと思う。学校組織と肯定的評価の因果関係が明白であり、組織を見直さないと根本的な解決には繋がらないのでは。

また、ICTに関しては、社会のニーズと、府立高校で生徒に教えるニーズが本当にあっているのかをよく考え展開するべき。PCスキルという形になると、資格を取ったり検定に通るところめざしがちになるが、そうではない。鉛筆や消しゴム、電卓を使うように、パソコンを使って物を書く、あるいは数字の計算をするという基本的なスキルというのをまず身に付けることをまず考えるべき。その結果として、探究的な活動に結びつき、探究的な活動の表現の一つとしてのPCスキルになってくるのではないか。

今、現在文科省で進めている学習Eポータルという学習支援のシステムが出てくるので、それと大阪府庁で導入しているGoogle Chromeも含めて、各種事業者との相関やその間のデータのやりとりについても注意を払う必要があるであろう。

その他、中学校との連携については、中学校の先生、高校の先生の俗人的なネットワークに頼っていると思うので、一定システム化することが必要ではないか。以上が、小酒井委員のご意見。

続いて田村委員のご意見を紹介する。

広報面では、アドミッションポリシー含め、各種表示する必要があるポリシーをもう少し明確かつわかりやすく書く必要がある。まず全校きちんと載せるのが第一で、さらに一定のルールでたどり着けるように整えていく必要がある。当然、従前の審議による入口、それから授業の中身、出口でそれぞれポリシーがあり、それらをわかりやすく示すことで、学校のありようが一定示せるのではないか。

もう一点、学校のネットワーク化に関して、府の資源を活用するという視点からは、学校同士を結んでいくような拠点間のネットワーク化に向けて、整備が要るのではないか。また、再編整備によっても各校の困り感は解消されず、常に困り感を持つ学校が出てくると思うので、マネジメントを含めてコンサルテーションするなど一緒にサポートしてあげるべき。以上が田村委員のご意見。

続いて金澤委員の意見を紹介する。

多様性・卓越性についての意見を述べる。

前回、子どもの権利条約について質問をさせていただいた。それは、日本では、子どもの権利条約が教育の中で生徒自身に明確に教えられる機会が圧倒的に少ないという課題があるためである。

今回の資料の中に、中学校の進路指導担当者から、卓越性について「『社会で生き抜く力』が身につくよう、リベラルアーツをはじめ人格形成に関わる様々な学びや気づきの場を提供してほしい」という意見があった。とても重要な指摘であると同時に、「社会で生き抜く力」のベースとなるものの一つに、子どもの権利条約を基盤におくことが重要であると考えます。それは、卓越性を追求していくときにも、「共生」の視点に基づいた、「社会的排除のない社会の在り方」を考えていくことができるような人材育成が必要だからだ。

そのためには、子どもの権利条約を含めて子どもの権利に関わる内容を学校の中できちんと教えるべきである。各学校個別という形ではなく、教育庁全体でそういう方向性が導けるように、実効性を持った取り組みに向けて検討を進めてほしい。

また、多様性については大阪府に限らず、そもそも日本の学校制度では、高校に入学すると、年齢も成績も均質的な集団の中での学びになってしまっているという構造的な課題がある。すぐにその教育構造を変えていくことは難しいかもしれない。しかし、多様性を重要視した、中高連携、校種の異なる高校間連携などは、大阪府庁のリソースを活用したり、市町村や地域との企業と共に行うことで実現できる工夫があのではないか。その取り組みを、ネットワーク連携に基づいた学びの特徴として、生徒自身に届けられる広報にしていくことが、生徒の視点にたった情報提供となるのではないか。

本日欠席されている委員の先生がたからのご意見は以上となる。

浅野会長：次にオンラインご参加の先生方からご意見をいただく。

池田委員：

私からは魅力を作りとその発信、また、先ほどの Google Chrome book をはじめとするデジタル活用の2点について意見を述べる。

中高連携についてはかなり進んでおり、活動についても考えておられるということは、今の資料や話から感じるし、これからすべきこともあると思う。一方で、大阪府の進学率は全国よりも少し高いということなので進学を考えている本人、また保護者の判断基準というところで、高大連携も大事になってくると感じた。

大学側の人間なので、高大連携について大学から手を差し伸べるべきものもたくさんあると思うが、高校側が求める高大連携とは一体何なのか、大学側がやりたい高大連携は何なのかというところのすり合わせが必要になってくると思う。デジタルのコミュニケーションツールなども活用することで、いろいろな次元の高大連携が可能になるのではないかと思うので、その点への言及を書き込んでもらいたい。

もう 1 点、学生がとりあえず普通科を選んで、それから文理の専門性をそこから判断していくというように、何が自分適しているのかというのを検討する機会提供が必要で、これはカリキュラムの中に取り込んで反映されていくべきと考える。この中には、キャリアの観点から社会に触れる機会提供というのも含まれるし、また、いわゆるトップ校に入らなくても、例えば国際的なことにチャレンジする機会といった幅広いチャンスも含まれると思う。そういった可能性や機会を各府立高校が設けることができるとさらに魅力は増すと思う。そのためには、様々なコスト、人件費、ネットワークが必要になってくる。それを個々の高校で対応するというのはかなり大変なことだが、教育庁を中心に、例えばその横展開をするなどにより、一括してアクセスができるような情報発信を取りまとめて提供することで、望む高校は簡単にそれにアクセスでき、活用できるような連携が可能であれば、どの地域の高校であっても、それが実現可能になるのではないか。この点でも、コミュニケーションツールの活用が非常に大事になる。

例えば、私が過去に経験したものと、国内の高校と海外の高校をオンラインで繋いで交流するというようなもの。なかなか実際に物理的に海外に行くことは難しいが、オンラインであれば、コストを非常に低く抑えることも可能になる。ツールを活用することでできることは広がっているので、様々な知恵を絞り、1 人 1 台端末の活用を含め、いろいろな提案が盛り込まれるべきではないか。卓越性というのを幅広く理解する上でこういった点は重視したい。

小原委員：

まず、データ上、志願倍率と、入学した後の学生の満足度、保護者満足度意識が相関をもっているという点は安心をした。学校の先生も含めて、関係者の意識がバラバラであると政策の打ちようがないと思うが、同じような環境設定をすれば同じように反応があるということで、政策によって状況を変えられる可能性があるという意味で、政策の可能性を感じた。

これから話し合うときのポイントとして、一つ目は、最初のデータで、学校が建った時期と志願率が示されている図があったと思うが、トレンドとしては新しい設置年度に向かうにしたがって志願倍率が少し下がっていく傾向にあり、その中で、たくさん一気に学校が建った時期で、志願倍率の分散が大きくなっていった。このバラつきがでたということは、人気があったところとそうではないところがあったわけで、この高いところの共通項をあぶり出すのは重要だと思う。それは別に統計的な話ではなく、上の方の点の学校に共通の何かがあるのかどうか。例えばその前年の広報活動に共通の何かがあったのか、あるいは学校の何かのその状況・環境で何か差がついているのか、その原因を見つける議論の道筋ってというのが見えるのではないか。

二つ目は、今述べた共通項では過去にやったことで何が成功したかしかあぶり出せないことになる。多様性や卓越性については、他の都道府県にもないような新しい試みによって、卓越性をさらに伸ばすような部分があると思う。それに関しては、卓越した能力を引き出すための何か新しい試みを何か考えていければよいのではないか。過去にやったことから成功したことを取り出すって意外に簡単だが、新しいことをす

るのは、他の知恵を注入する必要があると感じる。

山崎委員：

私の方からは、広報の仕方と、府立高校への入学数増加にフォーカスした 2 点、いくつか考えていることをお伝えしたい。

先ほどの資料にもあったが、中学 3 年生から高校に対する意識、情報をインプット、配信するのではなく、中 1 や中学校に入ったときから高校のあり方を配信するというご意見があったと聞いているが、おそらく、大阪府の私学というのは、教育長からもあった年収 800 万までの方の世帯には授業料無償化という話も聞くと、私学流れになるのかなと思う。教育に少し意識のある保護者が何をするかということ逆算すると、おそらく中学校に上がるタイミングで中学受験を行い、それなりの教育をサポートできることを選ぶのかと思う。それで考えると、広報の手段としては、中 1 中 2 にとどまらず、府立高校の魅力というのを小学校のタイミングから伝えていくというのでもいいのかなと考える。その方法として、予算もあるかと思うので考えてみたが、例えば英検などの試験会場を府立の高校に行くことにより、自ずとその高校に出向くことができる、小学校のときから府立高校でこんな環境で勉強ができるということを実体験できる。あとは、参考資料で府立高校が羅列されている資料を拝見したが、おそらく 1 校につき数行の説明であり、カテゴライズされていたのは地域だと思うが、先ほど事務局からの資料もあったように、大阪府下では通学時間は影響しないというのが私の感覚。それで言うならば、カテゴライズする項目、それを地域ではなく、何に特化したのかということを確認していく必要がある。咲くナビを Web 検索し、私に合う学校はどこか検索してみたが、ヒットしなかった。該当の学校はありません、というのが数回あり、何がヒットするのか、条件をどんどん消していったら 1 個出てきたところ。それが、もしもオープンなツールになるのであれば、小学生、中学生が高校を選ぶ上ですごく困難なのかなというふう感じた。広報のパンフレットを作るというのは金額が高いと思うが、一つ考えたのが、例えば在校生、卒業生、あとは大学の中でマスメディアなどを専攻されている学生さんに各高校に出向いていただき、その学校の魅力を訴えるような広報誌を作ってコンペティションする。そうすると、学生も自分の情報収集したものを発信し、大学であれば単位を取る、課題の一つに組み入れるとか、そういったものも面白い連携なのかなというふう考えた。

次に、トップ校以外の追従する学校へのブランディングというのも一つ考える必要があるのかなと。卓越性の項目があるときにずっと考えていたが、有名校以外のところで、ここの学校はこういうことが強いのだというのは、誰がどれだけイメージできるのか、いつも課題で考えていた。保護者の方が求めるのは、先ほどもあったかと思うが、卒業後の見える化。指定校推薦があるのか、ここの学校で塾に行かなくてもこの学校のカリキュラムだけでどういう大学に進学できるのか、はたまた、地域密着のもの作りの大阪、その企業にどこまで就職ができるのか、いわゆる今であればエンプロイアビリティが求められる。それを、在校の間にどれだけ高校の先生がサポートしてくださるのかというところの広報の一つになってくるのかなと考えている。

二つ目は、入学数の増加に関して考えてみたが、資料にもあったように、以前のような前期後期、あとは他府県であるような第 2 志望まで出せる、それによって生徒の選択肢が増えるかと思っている。やはり高校が一発勝負、公立高校は一発勝負になってくることが考えられる。知人の話だが、私学を併願で受けて、その生徒は A という府立高校に行きたいけれども、学校の先生方の考えで B というちょっと成績が下の

ところで受けさせるという事例も聞いている。そうなるのではなく、チャレンジしたい生徒がチャレンジしたい学校を第 1 志望、第 2 志望で受けることにより、併願校の私立に流れることもなくなり、府立高校の素晴らしい体験と経験ができるように府立高校に通わせてあげられる生徒を守れるのかなと感じた。以上。

浅野会長：

今オンラインでご出席頂いている委員からご意見をいただいた。小原委員のご発言の中で、資料 1 にある、高校の入試倍率と生徒の満足度の関係について触れられていたが、満足度と志願倍率の関係がもしわかっていれば、ご紹介いただきたい。

もう一つ、この満足度の設問内容が何かを教えていただければと思う。事務局に願います。

教育総務企画課参事：

志願倍率と満足度については学校にデータがあり、生徒、あるいは保護者の方、現場を預かる教職員に毎年度、それぞれの学校にアンケートをとっている。この場では、中身の詳細は割愛させていただきたいが、例えば、「学校は楽しいですか」、「学校での学びはどのようなことができましたか」など、入口・内容・出口に関わる、授業がわかりやすいか、先生方の関わりはどうかというような、いわゆる学校生活の全般に関わるアンケートをいくつか設定させていただいている。あわせて、各校でさらに自己の強みを発揮するために、過去そのもので聞いているものがある。ただ、教育庁としては、その学校から上がってきたデータを共通項として吸い上げ、整理をして今回お示しさせていただいている。肯定的評価では、特に、顧客ニーズということ考えると、生徒、保護者の方の満足度が主なものになってくると思う。また、小原委員や小酒井委員のご意見でもあった、学校が変わるために、現場の教職員の先生方がどのような取り組みを行っていくのか、ということについても今後分析が必要になってくると考えている。

浅野会長：

満足度が高ければ倍率も高いのは、ある程度の傾向として見られたということか。

教育総務企画課参事：

そこまで相関がきっちり分かるというのは難しいところかもしれないが、今回、肯定的評価の割合という形で棒グラフをお示しし、概ねグラフが 8 本あるので、75%というところで切らしていただいたが、大きく考えると、おそらく満足度の高低というところと志願倍率についても一定の関係が見て取れるのではないかと考えている。それぞれの象限で、おそらくいくつかの課題が生じているのではないかと考えている。

浅野会長：

もう 1 点、小原委員からのご意見で、生徒急増期に増えた高校で志願倍率の低い・高いところがわかれている。そこで志願倍率が高いところを何か共通的なことは何かなかったのかというご質問が一つある。

もう 1 点は、再編整備期の、2000 年から 2020 年のブロックを見ると、志願倍率の高いところ、1 倍を超えているところで、共通項目があれば、お示しいただきたい。

教育総務企画課参事：

共通項について、今回審議会を行うにあたり、事務局でも相当議論・検討をしてきた。同じ学校の地域であるとか、同じような規模感の学校、あるいはその通学距離を含めて検討はしてみたが、見つけれないというのが現状。学校急増期・再編整備期についても判明せず、難しいところがある。一般論になるかもしれないが、いわゆる生活指導の厳しさを含めて、いわゆる楽しくて・明るくて・キラキラしているというようなところで言うと、周囲からの評価として伸びやかに見えるイメージの学校と、厳しい学校があるのではないか。学校の取り組みと、先ほど保護者の方が言っていたような口コミやイメージというのがあり、昔のイメージを覆せないというところも言っていたので、実際の学校での取り組みと、それを評価する外部の方とのずれというところが一定あるのではないかと思う。ただ、何か違いがあるかということになると、今のところ事務局でも見つけれないというところでご容赦いただきたい。

浅野会長：

それでは、会場にてご出席されている委員の皆さんからご意見をいただきたい。

黒田委員：

事務局の方でたくさんインタビュー等をしていただき、情報提供にお礼をする。この間、私も様々考えたが、今日いただいた資料を事前に説明していただいた内容を含めて、大きく三つに分けて話をさせていきたい。

一つ目は、卓越性・多様性に関する情報発信について頂いた資料の中学校の進路指導の先生からのご意見のところにも、高等学校の情報が中学校の進路指導の先生でさえ届いてこない、集められていないということであるとか、志望校の選択に高等学校の指定校の大学に、指定校推薦の有無がどれぐらいあるかが書いてあったり、中学生の保護者の方からのご意見でも高校の情報がないということ、高校入試に中学校の成績がどう結びついていくのかということ中学校に入った段階で教えていただきたいなど様々ある。要は、府立高等学校が、正しく自分たちの情報を伝えるべき人たちに伝えきれていないという現実がわかったと思う。また、その情報が求められているのかどうかについては、私自身も大阪府立高校出身ですし、ずっと大阪に住んでいるので、先ほどお話にあった旧学区の頃の高校のイメージがやはり残っている。

あとは、自分の子どもの高校入試のときについて、私が以前、学習塾でもアルバイトをしたことがあり、そのあたりのことを考えると、中学生が高校を選択するときに、何で選ぶかと言ったら偏差値であり、自分が入れる高校はどこかということが、中学校よりも先に塾で言われる。11月、12月頃になったら、塾の方で面談があり、私立の高等学校の人たちは学習塾にも説明会に回ったり、個別懇談に回ったりし、良いという表現はいろんな価値観があるが、できるだけ良い学生に入学してほしいという思いがあり、私立を専願でいか併願でいか。専願でいけば、自分より上の学校に行けるかもしれない。もし、私立と併願で行くのであれば、もし私立が失敗したら、公立は下げないと安全には行けないかもしれない。話の段階で、高等学校で何を学ぶかということではなくて、どこに入れるかということになっているのと、一番関心がある情

報は高校の出口である。高等学校の中身ではなく、既に高等学校を卒業した後、どの大学に進学できているかとか、どういったところに就職できているかということが一番気になる情報。高等学校の中身の部分というのが、特に公立高校の場合は情報としてあまり提供されていない。私立に比べると不十分なところがあるのかなというふうには思っている。府立学校の卓越性・多様性ということに関しては、私の整理としては、府立高校はチェーン店的な部分があり、どこの府立高校に行っても安心して学ぶ環境があるというような、教育の基盤となる部分ということに関しては、府立高校は高い評価だと思う。都道府県によったり、広く言えば国によって、公立高校の位置が私立に比べると格段に低くなっているようなところもあると思うが、大阪府の場合は府立高校の教育として、質の安定性というのはかなり高く評価されてきていると思うので、その基盤となる部分をきちんと整えていくということが府立高校全体の卓越性に繋がっていくと思う。加えて、その基盤の部分が1階の部分だとしたら、2階建てにするか平屋で横に広げるか、いろいろだと思うが、高校ごとの独自の部分を更に狭い意味での卓越性や多様性という形で引き伸ばしていくことが重要かと思う。そういった意味で、前回ゲストスピーチに来ていただいた天王寺高校のように、歴史や伝統がある学校、卒業生の力とか、いろいろなものを活用できる場所もあって強いと思う。そうではなく、比較的新しくできた学校でも、他の先生もおっしゃっていたように、進学率や学力をアップさせるということはもちろんだが、高大連携をしたり、企業や公務員の皆さんのような方々と連携をしたり、高等学校同士の授業も含めた連携を含め、今だからこそできるような多様性・卓越性という部分もあると思う。1階・2階の部分、どちらも重要かと思う。

2点目は、卓越性や多様性について、特に卓越性で言うと、教育の学科で優れた教育をすとか、優れた人たちを引き伸ばしていくという発想に加えて、既にもう卓越性を持っている生徒がいたり、その生徒の中に持っているようなものを引き伸ばしてあげる意味で、教育の本質かもしれないが、偏差値の順番でいけば、中堅以降の学校では大事だと思っている。生徒や保護者のニーズを捉えて、それにどう高等学校が応えていけるのかというのが大事かと思う。社会を引っ張っていくようなリーダーになったり、科学技術や研究のトップになりたいと思う生徒もいれば、そこまでは考えていなくて、学校の先生のような、身近なところでいろんな人の役に立ちたいと思う生徒もいる。教育を変えていきたいということで、先生になる方もいれば、クラスで生徒さんと関わっていくことを通して、人間と関わる仕事をしたいなど、いろいろあると思うので、身近なところで頑張りたい、生徒たちをどう引っ張り上げていくかということで、この卓越性や多様性ということを考えられるかなというふうには思う。私もいろんな高校の授業を回ったり、受験生の面接をしたり、1年生も将来どうしたいかという話をするが、1年生の学生が将来どうしたいのか聞いたときに、私としては将来どういう仕事に就きたいのかとか、どういう進路を考えているのか聞いたが、お父さんお母さんを旅行に連れて行きたいという子がいた。何を言っているのか、最初はよくわからなかったが、よく聞けば、何かの仕事をし、親孝行ができるぐらいになりたいと言っていたことがわかった。自分が将来、何をしたらいいのかよくわからないと、大学に入ってきても、私が思ったのは、こうやって思っていることをきちんと高校が見つけてあげて、教育し、卒業し、就職まで持っていくのがある意味、教育だと思い直した。高等学校の段階で、すぐ先の将来まで見通せる子というのは、あんまりないと思う。トップ校になってくるといえるかもしれないが、この教育の中でそういったいろんな個性を持っている人たちを公費で引っ張り上げて実現させていってあげるような、教育の質の多様性とか、卓越性、将来の多様性というのものもあるかなと思った。それが2点目。

3点目は、あまり数値的に評価しにくいですが、高等学校の生徒同士の人間関係の良さみたいなものも結構重要だと思う。例えば、学生や生徒さんから話を聞く中で、高校生活がとても楽しかったとか、勉強がそれほどだったけど、部活がとても良かったとか、クラスが良かったとか、この人間関係が良いというのは、実はものすごく重要なことだと思う。だが、PRするべきときにあまりPRしないし、何かパンフレットに書いてあることもそんなにならぬと思う。先ほどの資料に、肯定的に自分の学校を捉えているというデータから見ても、生徒がそういうふうな思っているということなので、生徒同士の関係性や、卒業後の人間関係までも含めたような良さも、一つの評価としてはあるのかなと思った。

沼守委員：

今回いろんな説明をしていただいた中で、たくさん学校を抱えている大阪府で言えば、キーワードは多様性になると思っている。そういう意味で、今回ご説明いただいた各手法については、学校設置年度と志願数の定員割れと定員の関係については関連性があると思う。ただ、通学時間との関係では、関連性があまり見られないということ言えば、普通科高校で70校前後になるが、学校の特色をもう一度しっかりと見ていく必要があるのではないかなとは思っている。同じ年度にできた学校でも、生徒数を集めている学校、全く集められていない学校ということ言えば、経年変化で、学生の変更というのは、4学区制から9学区制に変わり、学区撤廃をした中で、そこで全ての定員割れが出てきたのか、その制度変更によって定員割れが出たのかという制度とのあり方の比較も必要ではないかと思う。今回大きく発想の転換をして、制度改革という意味で、今まであるものを改善するもの、拡充するもの、全体的な大阪府として撤廃するもの、個々のもの。今まで取り組んでいた制度をしっかりと見極めて整理していく必要がある。どこにどれが効いたかというの、必要ではないかと思う。あとは、個々の学校の努力や、教育庁の指導援助により、先ほども出てきた満足度の指標、評価手法を学校で統一するべきものではないか。基本があって、学校の独自のものは付け足してもいいと思うが、入学時や卒業時の内容や期間を決めて、同じ尺度で測れば、結果が出てくるものではないかと思う。同じ時期、また同じ形でやっていけるものがないのかということも個々の学校に当てはめながら検討していくということも必要ではないかと思う。いろいろと意見が出てきているが、すぐに変えられるものといえば、いわゆる中高の連携、これはすごく大事だとわかっていながら、長年の課題。先生方、中学校の先生方も努力され、体験学習、または学校訪問、進路指導の中での説明をされている中で、なぜ定着しないのかという部分もあるが、私学と違うのは、私学の先生は長い間いるが、公立学校の先生は、小中合わせて転勤がやむなしというのは当たり前の世界。公立高校でいえば、校長・教頭の管理職は、故郷の学校に戻ることはあるが、一般教員はそうではない。転勤は必要だと思うので、他の学校を経験しながら、成長しつつ、教員として戻り、中核を担うということも必要かと思う。こういったことを含めて、地域密着型で考えていくべきなのかと思う。分けて考えていくという意味で、文理学科は成功だと思う。明確に目的が中学生に見える。大事なことは、18歳で就職を目指し、きっちとキャリアを考えていく子や、進学か就職かで悩んでいる子をどのように力を入れて充実していくのかは、大学との連携や、企業との連携の中で、インターンシップの形の充実を、学校によって温度差があって当然だと思うので、そのターゲットをしっかりと見極めながら、施策を打っていくべきではないかと思う。中高連携という意味では、学生がいればいるほど、中学校の先生と高校の先生との接点が増えるということになるが、その辺をどうするか。

簡単に解決できることとして、情報発信のあり方で言えば、先生方に全て負担をかけているところではあるので、そのノウハウをきっちりと専門家から学校に下ろしていただきながら、手助けをしていくことも大事。中学校の方で言えば、府の高校のホームページがすべてあるので、既に実施されている大学のホームページを見る授業のように、中学校で1年時から高校のホームページを見る。それで言えば、高校の方も良いホームページを作らなければならないので、専門家の意見を聞き、どのホームページに人気があるのか、訪問回数がホームページに出てくるので、ここの学校訪問数は少ない、ここの学校は校長先生のところに圧倒的に訪問回数が多いとか、ここの学校の校長先生のホームページはないよとか、いろんなものが出てくると思うので、そういうことも分析しながら、定期的に中学校1年2年3年に対して行うことにより、中学校にいながら高校学校の勉強しながらやっていく中で、高校がタイアップしていくというのも一つのやり方であり、すぐに改善していけることではないかと思っている。不思議に思うのは、個人情報の関係もあるが、大学が全て決められているので、顔写真が出ていなくても教員の経歴が出されているが、中学校・高校は出さない。本人の同意があれば、中学生が見て、また、中学校については小学生から見て、この学校にはこんな先生がいて、こんな経歴があり、こんなスポーツの特技があってこんな大会に行っているなどが分かるので、私は高校も教員の経歴を出すべきかと思う。様々な問題があり、全て消している学校もあると思うが、その辺りは発想転換して、何をPRしていくのかというも踏み込んで考えていくときではないかと思っている。

もう1点、塾からの意見について、府内の共通テストを増やせばいいという考え方はあるが、これはすごく難しい問題で、今まで輪切り指導はやめようという中で、調査書の関係で言えば、ここ数年来チャレンジテストを導入しながら、どのように反映していくのかは教育庁の中で論議してきたところ。そういう意味で、どの層をターゲットにして統一テストを増やすのかという問題にもなってくると思うので、そこもしっかりと学校の特色を出していくべきではないかと思っている。先ほど述べた点についてはすごくセンシティブなので、しっかりと論議を重ねていくべきだと思う。以上。

小田会長代理：

3点、重なるところがあると思うが、お話をさせていただく。

まず1点目は、データについて。地域性について、電車から何分かかる、というのは影響がないということだが、全体を見ると、中央に行く方向があって、周辺は交通の便だけではなく、周辺の難しさ、真ん中の方に行こうとする傾向がある。課題も大きいと思うので、やはりもう一度、その地域ならではの特色をどう出していくかということを考えていく必要があると思う。この地域の意味は、やはり大きいかなと思う。保護者の、その頃の高校の印象もあると思うので、進路の中で、保護者にお話するような、中学校での取り組みもあった方がいいと思う。先ほど沼守委員からもあったように、ホームページを魅力的にするというのも大事な視点かと思う。地方ならではのこういう教育ができる、こういったことを大切にしていくという高校生が見て、これは行ってみたいなと思えるような、そんな情報を提供していくことは、このホームページに非常に大きな意味を持つと思っている。

二つ目は、何度も出てきていると思うが、高校と中学校と高校の先生方の教員の連携だと思う。顔が見えるということもあったと思うが、非常にこの中高連携というのは大事になってくると思っている。大学進学希望が多くなってきて、普通科も希望が多い。そういった状況からすると、高校に入ってから進路を決め

ていくというのが顕著になってきていると思う。やはり、大学まで行くことが前提にありながら、中学で決めきれずに高校において決める際に、高校の特色等について情報をしっかりと提供ができていたような中高連携。黒田委員がおっしゃったように、塾の先生の方が情報を知っているというのも残念なことで、中学校と高校の先生との連携の中で、情報をしっかりと持って、伝えていくというのが大事かと思う。私も最近、この相談を受けたときに、塾の先生の方がはっきり言ってくれるといったことを保護者は言っている。これは非常に難しいことだと思うが、情報提供をしっかりとすることは大事かと思う。もちろん中高だけでなく、大学でも指定校推薦の学校が大きな意味を持つというはドキッとしたが、指定校推薦、AO試験、そして、年内の入試で決めようとする傾向が非常に強くなってきている。センター試験から共通試験に変わるこの移行期ということもあると思うが、そういった意味で、指定校はどこにあるのか、情報としては非常に必要だということを改めて思った。指定校を出す時期も大学では考えないといけないと感じているところ。連携を大事に、高校の先生は中学校や大学とも連携しながら情報を収集していただくというのは非常に重要なことと思う。

最後に、卓越性、多様性という観点から見たときに、私の実感であるが、進学校のどちらかという成績の少し下の方の成績で入ってくる学生と、中間層の子で、成績がその学校で上の方で入ってくる学生を見たときに、やはり中間層で成績が上位の方が肯定感が高い。大学でも伸びる傾向がある。それが何かといえば、肯定的評価が非常に自分自身も大きくなり、高校時代の自己肯定感が大学に入って生きてくるかどうかになってくると思う。そう考えると、偏差値の高い学校というだけではなくて、いかに自己肯定感を高めていけるかということが大事ということを実感している。大事な視点としては、本人が自分の強みを知り、それを伸ばす教育、これがやはり大事だと思う。これはどの学校であってもそうだと思う。自分の強みを知る、そしてそれを伸ばすということがわかってくると、次の進路先や進学先でも活かしていき、大切になってくると思った。三つ述べさせていただいた。以上。

浅野会長：

今、委員の皆さんからいろんな観点からお話をいただいた。

私の意見も踏まえながら、今いただいた意見をいくつか整理すると、やはり、一つは今回のテーマである卓越性をどう捉えるかということだと思う。卓越性をあまりガチガチの定義で固めてしまうということではなく、皆さん方のお話を聞くと、該当の学校の生徒が主体となって、学校の強みを発見し、作り上げる。その結果が高校の魅力作りと自分の魅力作りに繋げていく気がする。先ほどのデータにおいて、志願倍率と設置年度を見ると、志願者の設置年度は古い学校の方が倍率が高い。これは、教員もそうだが、生徒が一生懸命学校の中で先生と一緒に活動をして、その学校ならではの魅力を作り上げてきたと思う。同時に、学校の魅力だけではなく、その学校に在籍した生徒の魅力も作り上げてきた感じがする。卓越性というのは、強みのセールスポイントを皆で作るプロセスで、学校も生徒もよしと、そういったアウトプットに繋がるところではないかと思う。もちろん、学校の強みは、学校の中にあるものだけを使うわけではなくて、その学校の中の強みを生かすために、外部人材を使いながらやっていくということも大切ではないかと思った。そして、この卓越性の今言った強み、あるいはセールスポイントを府立高校で何なのかということを一言で言うと、皆さん方の話をまとめると、社会人の入り口に立てる、そういった教育機会を提供していくということではないかと思う。これはもちろん、大学進学の子も就職の子も同じ。社会に入って、これから生きていく

入り口にきちんと立てる、そういった子どもたちを救うための機会を提供するということだと思う。そのためには、黒田委員がおっしゃった、何階建てというのはわかりやすい。やはりベースになるのは、高校の普通科で考えると、次の学びのステップになる学力の保障が当然ある。それに加えて、先ほどおっしゃったように、大阪の府立高校というのは非常にレベルの高いチェーン店だと、こういった安心感の部分がまずベースにあるのではないかと思う。そして、2階部分がこれに加えて、こういったことができ、このような生徒に対する様々な学びを提供できるといったものは2階部分になるのではないか。そういったものを提供していくということが必要。そういった中身の話がまず一つある。中身の話に加わっていくのは、ICTの活用によるリテラシーの提供の部分という気がする。そして、この中身の話に加えて、今日の話で出てきたものとして大きなものがいくつかあると思う。一つはやはり、情報発信・広報のあり方。いろんなアイデアが出たが、一言で言うと、ターゲットを見据えた効果的な広報をしなければいけないということと、私は、広報というのはこちらから情報をお送りするということと同時に、向こうからこちらにきちんと情報を入れてもらう広聴。行って来るの関係だと思う。こちらから、こういう高校がいいというだけでなく、何が高校に求められているのかという、その両方が入るようなチャンネルをセットで揃えていくという意味ではないかと思う。従って、一つは、情報発信、広報公聴。

二つ目は入試制度。何年か前に、前期後期がなくなり、一発勝負というような制度になっている。ただ、やはり志願者の様々な学びの機会を提供するためには、アイデアとして出た部分で、前期後期、昔やっていたというアイデアもあれば、兵庫県で実施されている第2志望というアイデアもなきにしもあらず。すぐやれというのは当然不可能なわけであるが、その是非、どういものなのかというところの研究は始めてもいいような気がする。

また、もう一点、地域との連携、高大の連携、中高の連携、いわゆる連携。大学の教員が多いので、特に大学との連携が出てきたが、中学校や塾も出てきた。垣根を越え、いろんなところから意見を言ってくれということではないかと思う。従って、そういった連携をするわけであるが、一番根っこにある部分は、教育庁の強大なネットワーク。これを使わない手はない。教育庁の様々な資源、あるいはそれが持つネットワークを使って、府立高校同士のネットワーク化や、場合によっては府立高校の通信制の高校を新しく作る、あるいは高校生同士のやりとりを促進するとか、様々なアイデアが出てくる。今回、いろいろご意見が出たと思う。

それでは、まだ少し時間があるので、委員にお伺いするが、何か言い残したこと、あるいはこういうデータがあるというのではないかというご提案をオンラインでのご出席の方も含め、お聞きしたい。

小原委員：

先ほどの共通項が見つからない、見つかりにくいという話があったが、もしかしたら探している中にないのかもしれない。というのも、今の浅野会長の話を聞いていて思ったが、例えば先生のあり方とか、学校の様子、先ほどお友達を介してとか、学校の雰囲気というのがあったが、何かそういうようなものは多分、簡単にはデータ化されておらず、駅から近いというのは手に入るようなところで今やっていると思うが、例えば、難しく新たな調査をしなくても、特別な教員を置いているとか、教員数、学校の様子など、公表情報で、あえて聞きに行かなくても手に入るもので、まだ共通項の軸に載せていないものがあると思う。今話を聞いていて思

ったが、その部分などに隠されたところがあればとても有益な情報になると思った。

池田委員：

私の方からは質問になると思う。私の勉強不足で見つかっていないだけかもしれないが、大学の小さなアイコンをクリックすると、情報に飛ぶというようなポータルサイトのようなものが国際科でくったりしてホームページベースで作られたりしているが、府立高校でそういったポータルサイトみたいなものはあるのか。そこに例えば、先ほど言ったようなこういった部分をもっと強調してほしいというような共通項のアイテムがあって、強みやここが魅力というのが随時、発信できるようなものがあると、保護者も高校生もそこにまず飛ぶという一元化ができてすごくいいと思うが、そういうものがあるのか、もしくはそういうものを作るような、中心になっていくべきなのは教育庁だと思うが、そういうことができるのかという一つ。

あと、府立高校ならでは、先ほど言及にもあったような、レベルの高いチェーン店というのが非常に私は納得し、腑に落ちた。それであれば、府立高校が横展開しながらやっている活動が見えるような、この高校とこの高校とこの高校と一緒にこういう活動を一齐に学生たちが交流してやっているというようなことがわかるような、そういった掲載があるホームページであるとか、昨今はネット世代であるので、親世代も子世代も全部ネットの情報からいろいろ判断していることが多いと思うが、そのような発信をされているのか。

教育総務企画課長：

今おっしゃっていただいているポータルサイトは、府立高校ではない。先ほど少しお話があった、咲くナビという、いわゆる中学校の生徒が選ぶ際に、どのような特色があるかというようなサイトは設けているが、実際に学校でこういうことをしたよというようなポータルサイトは今のところはない。ただ、教育ニュースという、いわゆる府教委の動きを発信しているホームページがあり、その教育ニュースの中で、府立高校でこういうことをしましたというような公表はさせていただいている現状がある。

教育振興室長：

少し補足をさせていただくと、例年であれば会場を借りて公立高校フェアをしているが、この2年、コロナの影響で開催ができなかったということがあり、オンライン上でWeb版の高校進学フェアをやっている。これは、各学校のホームページにもリンクを貼っていただいて、相互にリンクを張るような形で、例えば中学生がそのページに入っていけば、それぞれ興味を持った学校へのリンクが貼ってある。それから、先ほど聞いていただいた、横の繋がりを情報発信しているというのは、例えば北野高校が中心になってやっているWWL(ワールド・ワイド・ラーニング)の取り組みは、高校のホームページからは入れるようにはなっているが、教育庁の方からもそういうページにリンクできるような工夫は必要だと、今のご指摘を受けて考えていた。

浅野会長：

先ほど黒田委員がご発言された、レベルの高いチェーン店は名言だと思うが、黒田委員は、中身としてどういったところが特にレベルの高いチェーン店だというふうにお考えか。追加情報でお願いします。

黒田委員：

個人的に、チェーン店という言葉はポジティブなイメージがない部分もあり、表現が難しいと思ったが、理解されやすかったということであればいいと思った。レベルが高い、高品質だというイメージは、長く大阪に住んでいても、今でこそ私立の方に行こうと思っている子もいるかもしれないが、昔から大阪は、公立高校にみんなが行きたいという思いが強い地域だと思う。それに合わせて、いろんな公立高校を見に行っても、見た目だけの判断かもしれないが、設備もきちんとされているし、学校の先生方ももちろんしっかりした方々がいらっしゃるし、どこに行っても、ちょっとここなんかあれだな、と思うようなことはない。いろんな生徒や卒業生に入試や面接などでいろんなところで会うが、話を聞いていても、体験をしていたり、教育を受けられることもあるので、そういった点では、昔からの積み重ねがあって、今に至るレベルが高い、安定している。行ってみて、不安がないものにはなっていると思う。特定の府立高校がとつてもよくないということもなく、それぞれの高校で、学力が低いところであれば、何らかの対策を練っていたり、そういったことをきちんと手当てしてきて、今までに至っているというところでは、安心できるところだというふうには思っている。

浅野会長：

他に、オンラインでご出席の皆さん、そして会場にご出席の皆さん方、ご意見よろしいか。貴重な意見をたくさん出して頂いた。事務局におかれては、今回の意見を踏まえて、なかなか難しいところであるが、次回以降の審議の準備を進めていただけるようお願いしたい。抜けがあると後で指摘しづらい。書き加えるなど、ボリュームがあれば、これは良くないというのは発言しやすいので、頑張って作っていただければと思う。

それでは、本日の予定の議題は終了とする。他に意見はないようなので、私からの議事進行はこまめでとし、事務局にお返りする。